

各 位

会 社 名 株式会社 ユビキタス
代 表 者 名 代表取締役社長 三原 寛司
(JASDAQ・コード 3858)

問合せ先

役職・氏名 執行役員管理本部長 半田 晴彦
電 話 03-5908-3451

第二創業新ビジョン及び中期経営計画策定に関するお知らせ

株式会社ユビキタス（本社：東京都新宿区、代表取締役社長：三原 寛司）は、創業10周年を期に、今後の10年に向けて第二創業を目指すビジョンを発表します。あわせて、本年4月より3カ年にわたる中期経営計画（平成24年3月期～平成26年3月期）を策定いたしましたので、お知らせいたします。

1. 新ビジョン策定の背景

当社創業者は、「いつでも、どこでも、誰でも」面倒な操作なしにユビキタスネットワークの利便性を享受できる快適な生活を実現させるために株式会社ユビキタスを設立し、「つなぐのはユビキタス」のビジョンの下、「小さく、軽く、速い」独自の組込みソフトウェア製品を市場に提供することにより、継続した売上高成長を果たすことができました。おかげさまで今年、創立10周年を迎えることができました。

次の10年を第二創業期と位置付け、さらなる飛躍を目指し、第二創業ビジョンを発表いたします。

2. 新ビジョン骨子

- **Internet of Things（モノのインターネット）のグローバルリーダー**を目指して、新市場を切り開き、イノベーションへの挑戦を続けます。
- ソフトウェアの力により、あらゆる「モノ」と「モノ」、そして「人」をつなぎ、そこに流れる大量の情報の中からお互いの求める**価値を結ぶプラットフォーム**を提供します。

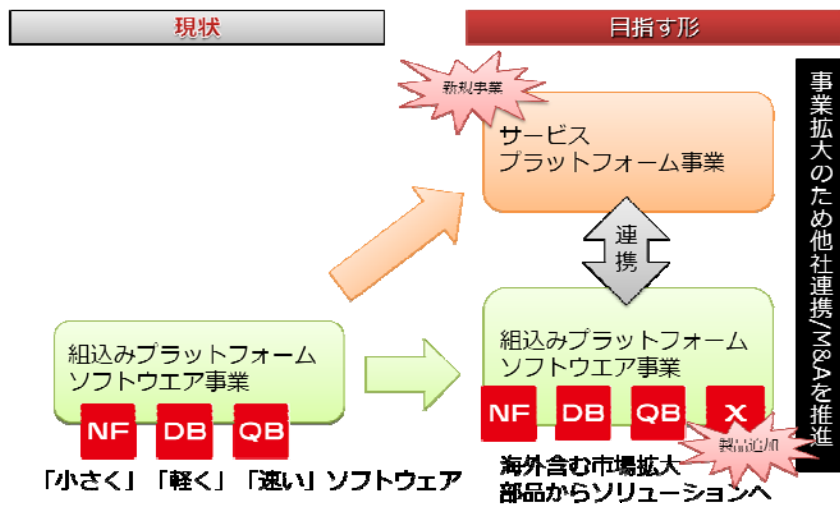
Internet of Thingsの時代においては、複数の異なるサービスと、多様なデバイスを結ぶプラットフォームが重要な役割を果たすことから、ユビキタス社は、多様なデバイスと多様なサービスを結び、それぞれが求める情報を、膨大な情報の中から抜き出して、「価値を結ぶ」サービスプラットフォームの提供をめざします。

また、ユビキタス社はこのサービスプラットフォームを従来の組込みプラットフォームソフトウェア事業に加えての新規事業分野と位置付け、事業化をすすめ、現在の組込みプラットフォームソフトウェア事業の拡大のためには新しい製品を追加し、海外を含むマーケットの拡大を目指します。新規事業への進出や新規製品の追加のためには、他社との連携やM&Aを積極的に活用していきます。

新ビジョンの詳細に関しては、末尾の添付をご覧ください。

3. 中期経営計画の概略

第二創業にあたっての最初の三年間の位置づけとなり、既存の組込みプラットフォームソフトウェア事業を成長させる事が重要なテーマとなりますが、サービスプラットフォーム関連においても開発を加速させ、収益への貢献を見込みます。中期経営計画においても、平成25年3月期以降において、現時点において想定し得る限定された範囲において、ネットワーク分野の売上として折り込んでおります。

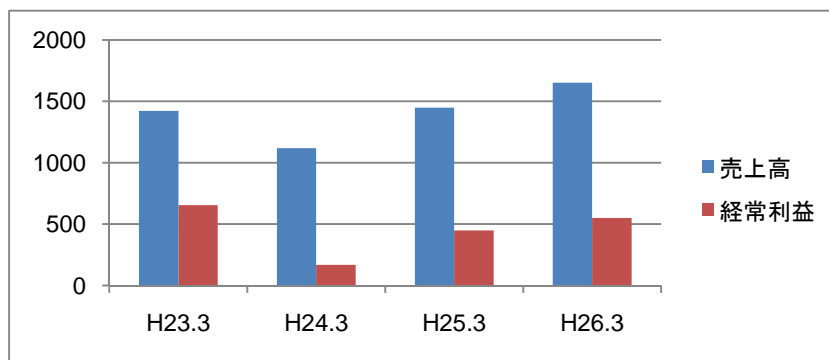


第二創業に向けたユビキタス社の事業拡大方針

4. 中期経営計画数値目標

(単位：百万円)

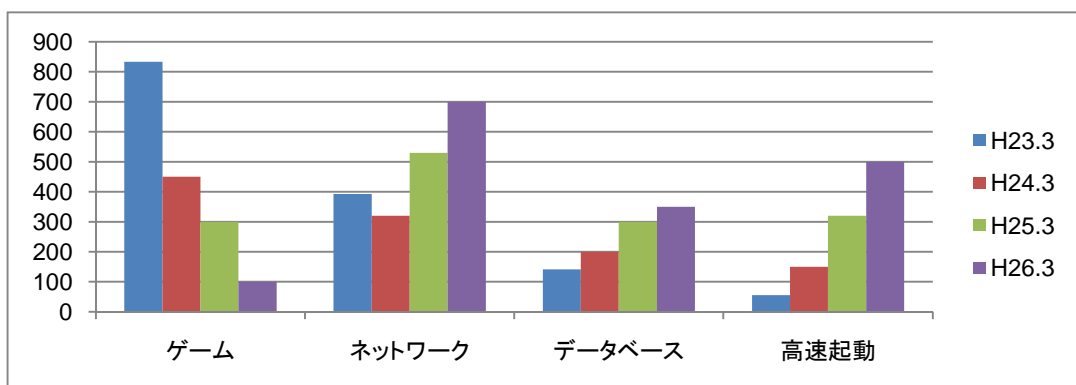
	H23年3月期実績	H24年3月期計画	H25年3月期計画	H26年3月期計画
売上高	1,422	1,120	1,450	1,650
営業利益	653	170	450	550
経常利益	653	170	450	550
当期純利益	382	110	270	330



■ 分野別売上高内訳

(単位：百万円)

	H23年3月期実績	H24年3月期計画	H25年3月期計画	H26年3月期計画
ゲーム分野	833	450	300	100
ネットワーク分野	393	320	530	700
データベース関連	142	200	300	350
高速起動関連	55	150	320	500
合計	1,422	1,120	1,450	1,650



以上

添付：ユビキタス社の新ビジョンの詳細

＜ Internet of Things 時代のグローバルリーダーへ ＞

ユビキタス社は2001年の創業以来これまで、来るべきユビキタスネットワーク社会の到来において必要とされる「小さく、軽く、速い」組込みソフトウェアを中心に事業を展開し、ゲーム機やテレビ、レコーダ、デジタルカメラのようなデジタル家電、車載オーディオ機器などに採用されることで業績を拡大させてきました。また、この10年の間、インターネットの普及がPCから携帯電話などのモバイルデバイスに移行し、ここ数年ではスマートフォンやタブレット型端末のようないわゆるスマートデバイスで「人」と「人」がいつでもどこでもネットワークを介してつながる状況が実現されてきています。一方で、センサーネットワークやホームコントロールのような、「モノ」をつなぐいわゆるユビキタスネットワークに関しては、いまだ実証実験の範囲を出るものではありませんでした。

しかしながら、昨今のネットワーク対応のためのハードウェア価格の下落と、地球環境やエネルギー効率に関する意識の高まりにより、いよいよあらゆる「モノ」と「モノ」がネットワークを介してつながる、いわゆる”Internet of Things”（モノのインターネット）が本格的に実現されつつあり、インターネットが近年もたらした革命に匹敵する規模の影響を、エネルギーの効率化や物流、ヘルスケアなど幅広い分野でもたらすと言われていています。

ユビキタス社はこのようなInternet of Things時代の市場を自ら切り開き、この分野のグローバルリーダーとなることを目指します。そのために、技術に立脚した企業としてイノベーションへの挑戦を続け、日本発の技術を、スピード感を持って世界に向けて提供していきます。

＜ 価値を結ぶプラットフォームの提供による、第二創業へ ＞

これまでのM2M(Machine-to-Machine)ネットワークにおいては、特定用途のためにネットワークに接続されたデバイスが、特定のネットワークサービスと接続されてきました。しかし、多様な「モノ」と「モノ」がつながるInternet of Thingsの時代においては、接続されるデバイスはそれぞれ物理的な接続方法や、通信プロトコルが異なる場合があります。また、これらのデバイスをネットワークで接続してサービスを提供する様々なサービス事業者やそのユーザーにとっては、それぞれが求めるデータはサービスの種類により、あるいはユーザーがいる場所などによって異なります。

ユビキタスは、多様なデバイスと、多様なサービスを結び、それぞれが求める情報を、膨大な情報の中から抜き出して、「価値を結ぶ」サービスプラットフォームの提供をめざします。

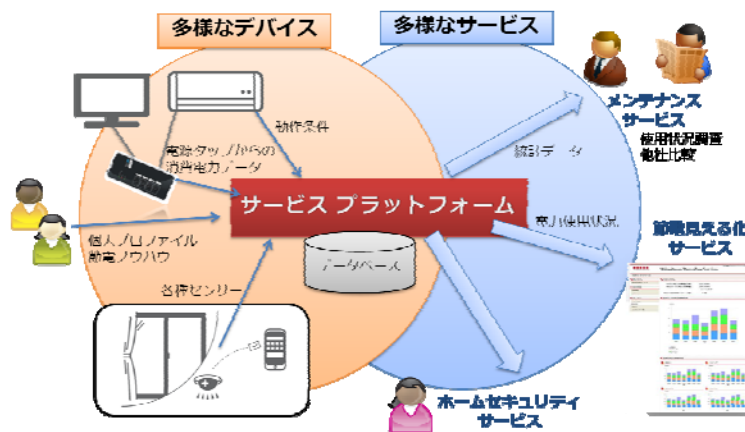


図 「価値を結ぶ」サービスプラットフォームの概念

図は、このサービスプラットフォームに、無線LAN内蔵電源タップ「iRemoTap」や、各種センサー、テレビやエアコンなどの家電から動作条件などのデータが集まってくるような場合を例として示しています。iRemoTapで測定されたデータは、本来、電力見える化サービスのためにデータを測定していますが、集約された電力の使用パターンを応用することで、高齢者見守りや留守宅監視のようなホームセキュリティサービスでも使用でき、個々の機種情報と組み合わせることにより、機器のメンテナンスサービスとの連携といった、機器を利用するユーザー、サービスを提供する事業者の双方の価値を結びつける新しいサービスの創出が可能になると考えております。